

歓迎し、放任しよう



巽 広 輔

長く大学教員をやっていると色々な仕事をさせられるのだが、近ごろは県内の高校とのかかわりが多くなってきた。とくに探究教育のアドバイザーを何度か引き受けている。高校の先生方にとって「探究」という、手を抜くこともできるが真面目にやろうとすると極めて手間のかかる科目を、どう効果的に運用するかということとは、各校の悩みの種となっている。

高校を訪問し、生徒たちの発表を聞く機会もあるが、「ちゃんとしたもの」が求められすぎているように感じる。高校の活動を低く見ているわけではないが、ちょっと背伸びしすぎ、という印象を受ける。私個人の意見としては、高校生と高校教員のできる範囲内で好きなことをすればお互いにとってハッピーだろうと思うのだが、何人かの先生方から聞いたところでは、「新規性が求められる」とか、「新聞に載ったりコンペで賞を取ったりなどの成果が求められる」といったプレッシャーがあるらしい。先生方も大変である。また最近は高校生による研究不正（探究不正？）も問題になってきている。成果主義だと不正に走る人が出てくるのは当然である。新規性や成果主義や研究者倫理にともなう苦勞など、大学に押し付けておけばいいのに。

サイエンスの入り口に立っている若者に対して私たち大人が取りうる最も望ましい態度は、場所と時間を与えたうえで余計な口出しをしないことだと私は思う。あなたはここで好きなことをしていいですよ、とメッセージを送る。安全面や倫理面などで明らかに間違った方向に進みそうなときは速やかにその芽を摘むが、それ以外ではできるだけ何もしない。若者は好きなことをする過程で、いろいろな問題に直面し、それを解決するためにいろいろな手段があることを知り、自分の出した結果についてもいろいろな解釈ができることを知る。その過程で、若者は世界の広さ、学問の奥深さを見、一人前の科学者へと成長していく。

本会に入会して間もない、またはこれから入会しそうな学生に対して私たちが取るべき態度も同じだと思う。私が学生のとき、本会の魅力は「いろいろな人が楽しそうに好きなことをしている」ことだった。当時の私の研究テーマは定量分析法というよりは、どちらかといえば物理化学寄りだったが、いろいろな人がいるのだから自分がいても問題ないように思えた。分析していないことによる疎外感などなく、本会の諸先輩方から「巽くん、ノーベル賞100個ぐらい取らなあかん」などといった壮大な達成目標とともに励まされ、育てられ、現在に至る（数値目標などというものとは本来こうあるべきだ）。

分析化学は、広い意味では認識の学であり、諸学に通じる学問である。学際的な存在価値を発信し（たぶんこの他学会よりも多様性がある）、分野にこだわらず新しい人々を受け入れ、好きなことをやってもらったら、本会の魅力は保たれるだろう。歓迎し、放任しよう。

〔TATSUMI HIROSUKE, 信州大学理学部, 中部支部長〕